

国

語

(
解答番号

1

～

38

)

第1問 次の文章を読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。なお、設問の都合で本文の段落に [1] ～ [10] の番号を付してある。

また、表記を一部改めている。(配点 50)

[1] モーツアルトの没後二〇〇年の年となった一九九一年の、まさにモーツアルトの命日に当たる二月五日に、ウィーンの聖シユテファン大聖堂でモーツアルトの《レクイエム》^(注1)の演奏が行われた(直後にLDが発売されている)。ゲオルク・シヨルティの指揮するウィーン・フィル、ウィーン国立歌劇場の合唱団などが出演し、ウィーンの音楽界の総力をあげた演奏でもあるのだが、ここで重要なのは、これがモーツアルトの没後二〇〇年を記念する追悼ミサという「宗教行事」であったということである。それゆえ、随所に聖書の朗読や祈りの言葉等、「音楽」ではない台詞の部分や聖体拝領^(注5)などの様々な儀式的所作が割り込む形になる。まさに「音楽」でもあり「宗教行事」でもあるという典型的な例である。

[2] モーツアルトの《レクイエム》という音楽作品として聴こうとする人は、これをどのように認識するのか? あるCDショツプのウェブサイトに^(ア)「ケイサイ」されているこの演奏のCDのレビュー欄には、「キリスト教徒でない並みの音楽好きには延々と続く典礼の割り込みには正直辟易^(ハ)としてくるのも事実。CDプレイヤーのプログラミング機能がカツ^(イ)ヤクする」というコメントが見られる。これを「音楽」として捉えようとするこの聴き手が、音楽部分だけをつなぎ合わせてひとまとまりとして捉えるような認識の仕方をしていいるさまが彷彿^(ホウフツ)としてくる。

[3] それに対して、この^(ウ)「モヨオし物」は「音楽」である以前に典礼であり、この聴き手のような本来のあり方を無視した聴き方は本末顛倒^(テンドウ)だとする立場も当然考えられる。こういうものは、典礼の全体を体験してこそその意味を正しく認識できるのであり、音楽部分だけつまみだして云々^(ウンウン)するなどという聴き方は、あらゆる音楽を、コンテクストを無視してコンサートのモデルで捉える一九世紀的なアク^(エ)「ヘイ」にすぎない、一刻も早く、そういう歪^(ユガ)みを取り去って、体験の本来の姿を取り戻さなければならぬ、そういう主張である。

4 この主張はたしかに一面の真理ではあろう。だがここでの問題は、一九世紀には音楽が典礼から自立したとか、それをまた、本来のコンテクストに戻す動きが生じているというような単純な二分法的ストーリーにおさまるものではない。もちろん、物事には見方によっていろいろな側面があるのは当然なのだから、音楽か典礼かというオールオアナッシングのような議論で話が片付かないのはあたりまえだが、何よりも重要なのは、ここでの問題が、音楽vs.典礼といった図式的な二項関係の説明にはおさまりきれない複合的な性格をもった、しかもきわめてアクチュアルな現代的問題を孕はらんでいるということである。

5 A これが典礼なのか、音楽なのかという問題は、実はかなり微妙である。たしかに、モーツァルトの命日を記念して聖シユテファン大聖堂で行われている追悼ミサであるという限りでは、(オ)「マギレもなく宗教行事であるには違いないが、ウィーン・フィルと国立歌劇場合唱団の大部隊が大挙してシユテファン大聖堂に乗り込んで来ているという段階で、すでにかなり異例な事態である。DVDの映像を見ても、前方の祭壇を中心に行われている(注7)司式を見る限りでは通常の「典礼」のようだが、通常の典礼にはない大規模なオーケストラと合唱団を後方に配置するために、聖堂の後ろにある通常の出入り口は閉め切られてしまっている。聖堂での通常の儀礼という範囲に到底おさまりきれないものになっているのだ。客(信徒と言うべきだろうか)もまた、典礼という限りでは、前の祭壇で行われている司式に注目するのが自然であり、実際椅子もそちら向きにセットされているのだが、背後から聞こえてくる音楽は、もはや典礼の一部をなす、というようなレベルをはるかにこえて、その音楽自体を「鑑賞」の対象にしている様子が窺うかがえる(実際、映像を見ると、「客」が半ば後ろ向きになって、窮屈そうな様子で背後のオーケストラや合唱の方をみている様子が映し出されている)。

6 そして何といっても極めつきなのが、この典礼の映像がLD、DVDなどの形でパッケージ化されて販売され、私を含めた大多数の人々はその様子を、これらのメディアを通して体験しているという事実である。これはほとんど音楽的なメディア・イヴェントと言っても過言ではないものになっているのだが、ここで非常におもしろいのは、典礼という宗教行事よりもモーツァルトの「音楽作品」に焦点をあてるという方向性を推し進めた結果、典礼の要素が背景に退くのではなくかえって、典礼をも巻き込む形で全体が「作品化」され、「鑑賞」の対象になるような状況が生じているということである。

7 このことは、**B** 今「芸術」全般にわたって進行しつつある状況とも対応している。それは「博物館化」、「博物館学的欲望」などの語で呼ばれる、きわめて現代的な現象である。コンサートホール同様、一九世紀にそのあり方を確立した美術館や博物館においては、様々な物品を現実のコンテクストから切り取って展示する、そのあり方が不自然だという批判が出てきた。たしかに、寺で信仰の対象として長いこと使われ、皆が頭をなでてすり減っているような仏像が、それ自体、美術的な、あるいは歴史的な価値をもつものとして、寺から持ち出されてガラスケースの中に展示され、それを遠くから鑑賞する、というような体験はとても不思議なものではある。最近ではその種の展示でも、単に「もの自体」をみせるのではなく、それが使われたコンテクスト全体をみせ、そのものが生活の中で使われている状況を可能な限りイメージさせるような工夫がなされたり、作家や作品そのものではなく、その背景になった時代全体を主題化した展覧会のようなものが増えたり、といった動きが進んできた。ところがそのことが、単に元のコンテクストに戻す、ということにとどまらない結果を生み出しているのである。

8 美術館や博物館の展示が、物そのものにとどまらず、それを取り巻くコンテクストをも取り込むようになってきていることは、別の見方をすれば、かつては「聖域」として仕切られた「作品そのもの」の外に位置していたはずの現実の時空もろとも、美術館や博物館という「聖域」の中に引きずり込まれた状況であるともみることができる。それどころか、一九世紀以来、こうした場で育まれてきた「鑑賞」のまなざしが今や、美術館や博物館の垣根をのりこえて、町全体に流れ込むようになってきていると言つてよいかもしれない。ドイツニーランドやハウステンボスと言うに及ばず、ウィーンでも京都でも、ベルリンや東京でも、いたるところに「歴史的町並み」風の場所が出現し、さながら町全体がテーマパーク化したような状況になっている。そういう場所で人々が周囲の景物に向けるまなざしは、たぶん美術館や博物館の内部で「物そのもの」に向けられていたものに近いものだろう。「博物館化」、「博物館学的欲望」といった語はまさに、そのような心性や状況を言い表そうとしているものである。これまで問題にしてきたシュテファン大聖堂での《レイイム》のケースも、それになぞらえれば、単に音楽をコンサートから典礼のコンテクストに戻したのではなく、むしろ典礼そのものをもコンサートの外的なまなざしのうちに置こうとする人々の「コンサートホールの欲望」によって、コンサートの外なる場所であったはずの現実の都市の様々な空間が、どんどん「コンサートホール化」されている状況の反映と言ひ換えることができるように思われる。

「音楽」や「芸術」の概念の話に戻り、今のそういう状況に重ね合わせて考え直してみるならば、この状況は、近代的なコンサートホールの展開と相関的に形成されてきた「音楽」や「芸術」に向けるまなざしや聴き方が今や、その外側にまであふれ出てきて、かつてそのような概念の適用範囲外にあった領域にまでどんどん浸食してきている状況であると言いうるだろう。逆説的な言い方になるが、一見したところ「音楽」や「芸術」という伝統的な概念や枠組みが解体、多様化しているようにみえる状況と裏腹に、むしろコンサートホールや美術館から漏れ出したそれらの概念があらゆるものの「音楽化」や「芸術化」を促進しているように思われるのである。だがそうであるならば、「音楽」や「芸術」という概念が自明の前提であるかのように考えてスタートしてしまうような議論に対しては、^C なおさら警戒心をもって周到に臨まなければならないのではないだろうか。このような状況自体、特定の歴史的・文化的コンテクストの中で一定の価値観やイデオロギーに媒介されることによつて成り立っているのだとすれば、ここでの「音楽化」や「芸術化」の動きの周辺にはたらいっている力学や、そういう中で「音楽」や「芸術」の概念が形作られたり変容したりする過程やメカニズムを明確にすることこそが決定的に重要になってくるからである。

10 問題のポイントを簡単に言うなら、「音楽」や「芸術」は決して最初から「ある」わけではなく、「なる」ものであるということになる。それにもかかわらず、「音楽」や「芸術」という概念を繰り返して使っているうちに、それがいつの間にか本質化され、最初から「ある」かのような話にすりかわってしまい(ちようど紙幣を繰り返して使っているうちに、それ自体に価値が具わっているかのように錯覚するようになってしまふのと同じである)、その結果は、気がついてみたら、「音楽は国境を越える」、「音楽で世界は一つ」という怪しげなグローバリズムの論理に取り込まれていたということにもなりかねないのである。

(渡辺裕『サウンドとメディアの文化資源学——境界線上の音楽』による)

(注)

- 1 レクイエム——死者の魂が天国に迎え入れられるよう神に祈るための曲。
- 2 LD——レーザードイス。映像・音声の記録媒体の一つ。
- 3 ゲオルク・シオルテイ——ハンガリー出身の指揮者、ピアニスト(一九二二—一九九七)。
- 4 ウィーン・フィル——ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のこと。
- 5 聖体拝領——キリストの血と肉を象徴する葡萄酒ぶどうとパンを人々が受け取る儀式。
- 6 アクチュアルな——今まさに直面している。
- 7 司式——教会の儀式をつかさどること。ここでは儀式そのものを指す。

問1 傍線部(ア)～(オ)に相当する漢字を含むものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

①
⑤

(ア)

① ケイサイ

- ④ ③ ② ①
- ① 名著にケイハツされる
 - ② 連絡事項をケイシユツする
 - ③ 方針転換のケイキになる
 - ④ 一族のケイズを作る

(ウ)

③ モヨオし物

- ④ ③ ② ①
- ① 議案をサイタクする
 - ② サイミン効果のある音楽
 - ③ カツサイを浴びた演技
 - ④ 多額のフサイを抱える

(オ)

⑤ マギれ

- ④ ③ ② ①
- ① 不満がフンシユツする
 - ② フンベツある大人になる
 - ③ 議論がフンキユウする
 - ④ 決算をフンシヨクする

(イ)

② カツヤク

- ④ ③ ② ①
- ① 神仏のごりヤクにすぎる
 - ② あの人はケンヤク家だ
 - ③ 面目ヤクジョの働きをする
 - ④ 重要なヤクシヨクに就く

(エ)

④ アクヘイ

- ④ ③ ② ①
- ① 機会のコウヘイを保つ
 - ② 心身がヒヘイする
 - ③ 室内にユウヘイされる
 - ④ オウヘイな態度をとる

問2

傍線部A「これが典礼なのか、音楽なのかという問題は、実はかなり微妙である。」とあるが、筆者がどのように述べる理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

6

- ① 追悼ミサにおける《レクイエム》は、音楽として捉えることもできるが、それ以前に典礼の一部なのであり、典礼の全体を体験することによって楽曲本来のあり方を正しく認識できるようにもなっているから。
- ② 追悼ミサにおける《レクイエム》は、もともと典礼の一要素として理解されてはいたが、聖書の朗読や祈りの言葉等の儀式的な部分を取り去れば、独立した音楽として鑑賞できると認識されてもいるから。
- ③ 追悼ミサにおける《レクイエム》は、典礼の一要素として演奏されたものではあったが、参列者のために儀式と演奏の空間を分けたことよって、聖堂内でありながら音楽として典礼から自立することにもなったから。
- ④ 追悼ミサにおける《レクイエム》は、典礼の一部として受容されてはいたが、演奏を聴くことを目的に参列する人やCDを購入する人が増えたことで、典礼が音楽の一部と見なされるようにもなっていたから。
- ⑤ 追悼ミサにおける《レクイエム》は、典礼を構成する一要素であるが、その典礼から切り離し音楽として鑑賞することもでき、さらには典礼全体を一つのイベントとして鑑賞するような事態も起きているから。

問3 傍線部B「今『芸術』全般にわたって進行しつつある状況」とあるが、それはどのような状況か。その説明として最も適当な

ものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

7。

- ① 展示物をその背景とともに捉えることで、美術館や博物館の内部で作品に向けられていたまなざしが周囲の事物にも向けられるようになり、現実の空間まで鑑賞の対象に組み込まれてきたという状況。
- ② 展示物を取り巻くコンテキストもイメージすることで、美術館や博物館内部の空間よりもその周辺に関心に移り、物そのものが置かれていた生活空間も鑑賞の対象とする考え方がもたらされてきたという状況。
- ③ 作品の展示空間を美術館や博物館の内部に限ったものと見なすのではなく、地域全体を展示空間と見なす新たな鑑賞のまなざしが生まれ、施設の内部と外部の境界が曖昧になってきたという状況。
- ④ 生活の中にあつた事物が美術館や博物館の内部に展示物として取り込まれるようになったことで、作品と結びついたコンテキスト全体が鑑賞の対象として主題化されるようになってきたという状況。
- ⑤ 美術館や博物館内部の展示空間からその外に位置していた現実の時空にも鑑賞の対象が拡大していくにつれて、町全体をテーマパーク化し人々の関心と呼び込もうとする都市が出現してきたという状況。

問4

傍線部C「なおさら警戒心をもって周到に臨まなければならないのではないうか」とあるが、筆者がどのように述べる理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

8

① 「音楽」や「芸術」は、コンサートホールや美術館の内部で形成された「博物館学的欲望」に基づいて更新され続けてきた概念である。その過程を無視して概念を自明のものとしてしまうと、概念化を促す原動力としての人々の心性を捉え損ねてしまうから。

② 「音楽」や「芸術」は、コンサートホールや美術館における演奏や展示を通して多様に評価され変容してきた概念である。その過程を無視して概念を自明のものとしてしまうと、「音楽で世界は一つ」などというグローバリズムの論理に取り込まれてしまうから。

③ 「音楽」や「芸術」は、コンサートホールや美術館といった「聖域」が外部へと領域を広げていったことで発展してきた概念である。その過程を無視して概念を自明のものとしてしまうと、あらゆるものが「音楽化」や「芸術化」の対象になってゆく状況を説明できなくなるから。

④ 「音楽」や「芸術」は、コンサートホールや美術館の中で生まれた価値観やイデオロギーを媒介として形作られてきた概念である。その過程を無視して概念を自明のものとしてしまうと、それらの周辺にはたらいっている力学の変容過程を明確にすることができなくなるから。

⑤ 「音楽」や「芸術」は、コンサートホールや美術館で育まれた「鑑賞」のまなざしと関わり合いながら成り立ってきた概念である。その過程を無視して概念を自明のものとしてしまうと、それ自体が本質化され、普遍的な価値を持つものとして機能してしまいかねないから。

問5 この文章の構成・展開に関する説明として適当でないものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 9。

① 段落は、議論の前提となる事例をその背景や補足情報とともに提示して導入を図っており、2・3 段落は、

1 段落で提示された事例について説明しながら二つの異なる立場を紹介している。

② 段落は、2・3 段落で紹介された立場を基に問題を提起しており、5・6 段落は、4 段落で提起され

た問題についてより具体的な情報を付け加えた上で議論の方向づけを行っている。

③ 段落は、前段落までの議論をより一般的な事例を通して検討し直すことで新たに別の問題への転換を図っており、8 段落は、7 段落から導き出された観点を基に筆者の見解を提示している。

9 段落は、7・8 段落で導き出された観点に基づいて問題点を指摘しており、10 段落は、その問題点を簡潔

に言い換えつつ 9 段落の議論から導かれた筆者の危惧を示している。

問6

授業で本文を読んだSさんは、作品鑑賞のあり方について自身の経験を基に考える課題を与えられ、次の【文章】を書いた。その後、Sさんは提出前にこの【文章】を推敲^{すいこう}することにした。このことについて、後の(i)～(iii)の問いに答えよ。

【文章】

本文では現実を鑑賞の対象とすることに注意深くなるよう主張されていた。しかし、ここでは作品を現実世界とつなげて鑑賞することの有効性について自分自身の経験を基に考えてみたい。

小説や映画、漫画やアニメの中には、現実に存在する場所を舞台にした作品が多くある。そのため、私たちは作品を読み終えたり見終わったりした後に、実際に舞台となった場所を訪れることで、現実空間と作品をつなげて鑑賞することができる。

最近、近くの町がある小説の舞台になっていることを知った。私は何度もそこに行ったことがあるが、これまでは何も感じるものがなかった。ところが、小説を読んでから訪れてみると、今までと別の見方ができて面白かった。(a)

このように、私たちは、作品世界というフィルターを通じて現実世界をも鑑賞の対象にすることが可能である。(b)一方で、小説の舞台をめぐり歩いてみたことよって小説のイメージが変わった気もした。(c)実際の町の印象を織り込んで読んでみることで、作品が新しい姿を見せることもあるのだ。(d) 作品を読んで町を歩くことで、さまざまな発見があった。

(i) Sさんは、傍線部「今までと別の見方ができて」を前後の文脈に合わせてより具体的な表現に修正することにした。修正する表現として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 10。

- ① なにげない町の風景が作品の描写を通して魅力的に見えてきて
- ② その町の情景を思い浮かべながら作品を新たな視点で読み解けて
- ③ 作品そのままの町の様子から作者の創作意図が感じられて
- ④ 作品の情景と実際の風景のずれから時間の経過が実感できて

(ii) Sさんは、自身が感じ取った印象に理由を加えて自らの主張につなげるため、「文章」に次の一文を加筆することにした。加筆する最も適当な箇所は(a)～(d)のどの箇所か。後の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 11。

それは、単に作品の舞台に足を運んだということだけではなく、現実の空間に身を置くことによって得たイメージで作品を自分なりに捉え直すということをしたからだろう。

- ① (a)
- ② (b)
- ③ (c)
- ④ (d)

(iii) Sさんは、この【文章】の主張をより明確にするために全体の結論を最終段落として書き加えることにした。そのための方針として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 12。

① 作品世界をふまえることで現実世界への認識を深めることができるように、自分が生きている現実世界を知るために作品理解は欠かせない。その気づきを基に、作品世界と現実世界が不可分であることに留意して作品を鑑賞する必要があるといった結論を述べる。

② 作品世界と重ね合わせることで現実世界の見方が変わることがあり、それとは逆に、現実世界と重ね合わせることで作品の印象が変わることもある。その気づきを基に、作品と現実世界の鑑賞のあり方は相互に作用し得るといった結論を述べる。

③ 現実世界をふまえることで作品世界を別の角度から捉えることができるが、一方で、現実世界を意識せずに作品世界だけを味わうことも有効である。その気づきを基に、読者の鑑賞のあり方によって作品の意味は多様であるといった結論を述べる。

④ 現実世界と重ね合わせることで作品世界の捉え方が変わることがあり、そのことで作品に対する理解がさらに深まることになる。その気づきを基に、作品世界を鑑賞するには現実世界も鑑賞の対象にすることが欠かせないといった結論を述べる。

第2問

次の文章は、牧田真有子「まきたまゆこ棧橋」(二〇一七年発表)の一節である。一六歳の高校生「イチナ」の家に、八歳年上の「おば」が訪れ、同居するようになる。イチナが幼少期に祖父の家で親しく接していたおばは、中学生の頃から演劇の才能を発揮し、その後は劇団に所属しながら住居を転々としていた。これを読んで、後の問い(問1～7)に答えよ。なお、設問の都合で本文の上に行数を付してある。(配点 50)

イチナが幼い頃のおばの印象は、「ままごと遊びになぜか本気で付き合ってくれるおねえさん」だった。幼稚園や小学校から祖父の家に直行するときのイチナの目当ては、おばと定まっていた。学者だった祖父の書斎のソファで昼寝をして、おばが中学校から帰ってくるのを待った。やがて路地の角を曲がってざくざくと砂利を踏む足音で目がさめ、跳ね起きて玄関へ急ぐ。

「イチナ、少しはあの子にも羽を伸ばさせてあげなさい」

背後から祖父が神経質な口調でたしなめ、おばは靴を脱がないままかばんだけどすんと置いて、「いいよ。休みに行くようなもんだから」と書斎の方角に言い放つ。イチナはおばにまとわりつくようにして一緒に家を出る。

杉の木立に囲まれた児童公園が遊び場だった。おばは一度も足をとめずたたと砂場へ向かう。滑り台や鉄棒で遊んでいた、年齢にばらつきのある七、八人が我先にと集ってくる。

ままごとといっても、ありふれた家庭を模したものであったためしはない。専業主婦の正体が窃盗団のカシラだとか、全面闘争よりも華やかな記憶とともに滅びていく方を選ぶ王家の一族だとか、(注1)うらぶれた男やもめと彼を陰に陽に支えるおせっかいな商店街の面々だとか、凝っている。「我が領土ではもはや革命分子らが徒党を組んでおるのだ」(注2)後添えをもらうんなら早いに越したこたあないぜ」等々、子どもには耳慣れないせりふが多い。おばは一人で何役もこなす。彼女からは簡単な説明があるだけなので、子どもたちは的外れなせりふを連発するが、**A** (注3)おばがいる限り世界は崩れなかった。

家にいるときには決してしない足の組み方。「三行半」(注3)という言葉を口にするときだけ異様に淡くなるまなざし。寂しげな舌打ち。ここに、ここにあるはずのない場所とががらりと入れ替わっていく一つの大きな動きに、子どもたちは皆、巻き込まれた

がった。全力を尽くして立ちこぎするブランコよりも、たしかに危険な匂いがした。

夕暮れの公園を斜めに突っ切っていく通行人も多い。おばの同級生が苦笑まじりに声を掛けてくる。会社帰りらしい年配の男性が立ちどまってしげしげと見ていくこともある。制服姿のおばは全然かまわずに続ける。さまざまな遊具の影は誰かが引っぱっているかのように伸びつづけて、砂の上を黒く塗っていく。

20

公園の砂場で三文役者を務めた幼馴染たちの一人と、イチナは今も親交がある。

映画を見に行く日取りを決めるため、その年上の友人と電話していた夕方のことだ。話の切れ目にイチナは、「なんと今あのおばが居候中(注5)でね」と言った。電話口の向こうに、すばやい沈黙があった。階下の台所からは天ぶらを揚げる母親の声と手伝っているおばの声が、一箇所に重なったり離れたりして聞こえていた。二人の声質はそっくりで、わずかに小さいおばの声は、母の声の影のようだった。一拍おいて友人は「フリーライボーとか、なまで見んのはじめてかも」とちぐはぐなことを言った。

25

「なまで見てた頃は定住してたしね。懐かしくない？ 電話代わろうか」

イチナが冗談半分で勤めると、相手も「結構です」と笑って言ったが、そこには何か、拭いきれていない沈黙が交じっているようだった。

「おばさんと話すのは億劫？」とイチナは訊いた。

30

「いや、これ言っているのいいのかな。おばさんさ、私の家にもちよつと住んでたんだよね。去年の春。いきなりだった。寝袋かっいで玄関に立っている人が誰なのか、最初ぴんと来なかったもん。あ、別にいいんだよ、じゅうぶんな生活費入れてくれてたし。

私もほら、一人暮らしも二年目で飽きてたし」

空いている方の手で絨毯の上の糸屑(いとくず)を拾っていたイチナの動きがとまる。言ってしまうと友人は、**B** もう気安い声を出した。

35

「私まで『おばさん』呼ばわりは悪いと思いつつ。イチナのがうつっちゃって」

「昔、それとなく『おねえさん』にすり替えようとする度おじいちゃんから威嚇されてね」

イチナは狼狽ろうばいを引きずったまま再び手を動かし始める。彼女の祖父は言葉の正式な使用を好む。続柄の呼称についての勝手な改変は、たとえ幼い孫相手であつても許さなかつた。

台所ではおばが、水で戻すわかめの引きあげが早い、と母から厳しく指摘されている。

「しかしあのおばさんてのは、全つ然、ぼろ出さないね」

友人は思い出したように言った。イチナはすかさず反論した。

「けっこうずばらだしそそっかしいけど」

45 「失敗しないって意味じゃなくて、失敗してもぜったい言い訳しないと。痛いときは存分に痛がるとか、年上だからって虚勢張らないとか。自然体の人ってのはいるけど、おばさんの場合いっそ自然の側みたいに見える時ない？ 他人なのに不透明感なさすぎて。朝顔の観察日記みたいに記録をつけられそうっていうか。共同生活、悪くなかつたよ。なぜかはつきり思い出せないけど」

イチナは今度は、絨毯の上の糸屑を拾う手をとめない。上手うまくとめられなかつたのだ。電話を切ると、「終わったなら早く手伝いに来なさい」という母親からの伝言を携えておばが上がってくる。肩までの髪をざつと束ね、腕まくりした格好のおばに、イチナは先の通話相手の名を挙げる。

50 「もう泊めてくれるような知り合いが底をついたからってさ、私の友達のとこにまで勝手に押しかけるのやめてよ。おばさんとあの子って、ほぼ見ず知らずの人ってくらいの関係じゃん、今となつては」

「けど完全に見ず知らずの人の家ってわりと暮らしにくいものだよ」

「嘘うそでしょ試したの？ ていうか、そもそもなんでまた居候？」

「たしかにする理由はない。でもしない理由もなくなる？」

55 「迷惑がかかる。セキュリティの問題。不眠ふしんで厚かましい。しない方の理由はひっきりなしに湧いてくるんだけど？」

「それはその人が決めることでしよう。その人のことを私が予め決めるわけにはいかないでしょう」

「イもつともらしい顔で言わないでよ」

60 イチナが物の単位を誤ったりすると、すかさず正して復唱させる祖父に、おばは目鼻立ちが似ている。しかし厳格な祖父ですら、本当のことを受け入れれば自分自身を損なうような場面では(ウ)やにわに弁解し、自分の領域を護ろうとするときがあった。友人の言うとおりなのかもしれない、とイチナは考える。普通、人にはもつと、内面の輪郭が露わになる瞬間がある。肉体とは別に、その人がそこから先へ出ることのない領域の、縁。当人には自覚しきれなくても他人の眼にはふしぎとなまなましく映る。たしかにおばには、どこからどこまでがおばなのかよくわからない様子があった。氷山の一角みだけに。

居候という根本的な問題に対して母が得意の批評眼を保てなくなったのは、おば自身の工夫による成果ではない、とイチナはふむ。母だけではない、おばを住ませた人たちは皆その、果てのなさに途中で追いつけなくなってしまふのだ。だから居候が去った後、彼らはおばとの暮らしをはつきりと思ひ出せない。思ひ出したなら観察日記でもつけるしかない。C 私はごまかされたくない、とイチナは思う。

「そうかイチナ、する方の理由これでいい？」階段を下りかけていたおばの、言葉だけが部屋に戻ってくる。「私の肉体は家だから。だから、これより外側にもう一重の、自分の家をほしいと思えない」

70 演じることに役柄に自分をあげ払うから。そういう意味だとイチナが理解したときには、おばはもう台所にいる。イチナは何してるのよ、という母親の声と、のんきそうにしてる、というおばの声が、空をよぎる鳥と路上を伝う鳥影のような一對の質感で耳に届く。

(注) 1 男やもめ——妻を失った男。

2 後添え——二度目の配偶者。

3 三行半——夫から妻に出す離縁状。

4 三文——価値の低いこと。

5 居候——他人の家に身を寄せ、養ってもらっていること。

6 フーライボー——風来坊。居どころを気まぐれに変えながら生きている人。

問1 傍線部(ア)く(ウ)の語句の意味として最も適当なものを、次の各群の①く⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

号は

13

く

15

。

(ア)

うらぶれた

13

- ⑤ 度量が小さく偏屈な
 ④ だらしなく大雑把な
 ③ 不満げで投げやりな
 ② みすばらしく惨めな
 ① 優柔不断で不誠実な

(イ)

もつともらしい

14

- ⑤ 悪びれず開き直るような
 ④ まるで他人事だと突き放すような
 ③ へりくだり理解を求めるような
 ② いかにも正しいことを言うような
 ① 問い詰めてやりこめるような

(ウ)

やにわに

15

- ⑤ 多弁に
 ④ 即座に
 ③ 強硬に
 ② 半端に
 ① 柔軟に

問2 傍線部A「おばがいる限り世界は崩れなかった」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の

① ～ ⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 16。

- ① おばの「ままごと」は、ありきたりの内容とは異なるものだったが、子どもたちが役柄に合わない言動をしても、自在な演技をするおばに生み出された雰囲気によってその場が保たれていたということ。
- ② おばの「ままごと」は、もともと子ども相手のたわいのない遊戯だったが、演技に魅了されたおばの姿勢によって本格的な内容になり、そのことで参加者全員を夢中にさせるほどの完成度に達していたということ。
- ③ おばの「ままごと」は、その中身が非日常的で大人びたものであったが、子どもたちの取るに足りない言動にもおばが相応の意味づけをしたため、結果的に子どもたちを退屈させない劇になっていたということ。
- ④ おばの「ままごと」は、奇抜なふるまいを子どもたちに求めるものだったが、人目を気にしないおばが恥じることなく演じたため、子どもたちも安心して物語の設定を受け入れることができたということ。
- ⑤ おばの「ままごと」は、子どもたちにとって設定が複雑で難解なものであったが、おばが状況にあわせて話の筋をつくりかえることで、子どもたちが楽しんで参加できる物語になっていたということ。

問3 傍線部B「もう気安い声を出した」とあるが、友人がこのような対応をしたのはなぜか。その理由の説明として最も適当な

ものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

17。

- ① 同居していたことをおばに口止めされていた友人は、イチナが重ねて尋ねてくるのを好機としてありのままを告げた。そのうえで、おばの生活についてイチナと語り合う良い機会だと思つてうれしくなったから。
- ② おばと同居していた事実を黙っていた友人は、イチナに隠し事をしてゐる罪悪感に耐えきれず打ち明けてしまった。そのうえで、イチナとの会話を自然に続けようと考えてくつろいだ雰囲気をつくろうとしたから。
- ③ 同居するなかでおばと親密になつた友人は、二人の仲を気にし始めたイチナに衝撃を与えないようにおばとの関係を明かした。そのうえで、現在は付き合いがないことを示してイチナを安心させようとしたから。
- ④ おばとの同居を伏せていた友人は、おばを煩わしく感じているとイチナに思われることを避けようとして事実を告げた。そのうえで、話さずにいた後ろめたさから解放されてイチナと気楽に会話できると考えたから。
- ⑤ おばと同居していたことをイチナには隠そうとしていた友人は、おばがイチナにうっかり話してしまうことを懸念して自分から打ち明けた。そのうえで、友人関係が破綻しないようにイチナをなだめようとしたから。